

5. 「施設のみならず飯が食いたい」と終末期を介護施設で迎えた 1 事例

恩田千栄子<sup>1</sup>, 倉沢 芳美<sup>2</sup>, 阿部 遥香<sup>1</sup>  
花形 光枝<sup>2</sup>, 古池きよみ<sup>1</sup>, 武井 智幸<sup>1</sup>  
川本 陽子<sup>3</sup>

- (1 公立藤岡病院 緩和ケアチーム)
- (2 同 東 4 階病棟)
- (3 ケアプラン ゆう)

【はじめに】 近年、独居の高齢者は増加傾向にある。独居の高齢者が終末期をどのように迎えたいかは、重要な課題となっている。意思決定支援において、終末期をどのように迎えたいか医療チームで関わることはアドバンス・ケア・プランニングのひとつとして重要である。今回、「施設のみならず飯が食いたい」と希望し、通所していた介護施設で終末期を迎えることを選択した 1 事例を報告する。

【倫理的配慮】 当院の倫理規定に基づき、ご遺族に説明し同意を得た。【患者紹介】 A 氏、70 歳代。病名：腎盂尿管がん。X 年：腎尿管全的術施行、化学療法などを行なう。X 年+Y 月：経尿道的膀胱腫瘍切除術施行。【経過】 X+年、腎機能悪化、疼痛コントロール、食欲低下で再入院となる。腎瘻増設を拒否していたが、施設のスタッフを交えて、医療チームと検討を重ね腎瘻増設を行なった。腎機能は改善したが、食欲低下や浮腫、倦怠感などは軽減されず、今後の療養について話し合われた。A 氏は独居であり、親戚も遠方だったことから最期をどのように迎えたいか話し合いが必要であった。親戚や施設スタッフと話し合い、A 氏の「施設のみならず飯が食いたい」との意思を尊重し、介護施設の転所が決定し、調整を行なった。施設スタッフからは、「みんな待っています、お世話させていただきます」と

の言葉が聞かれ、2 日後に退院した。約 2 週間後、介護職員に見守られ永眠された。【考察】 患者が、治療・予後を理解し、終末期をどのように迎えたいかの意思決定ができる環境をチームで検討することは重要である。患者の希望が表出できる関わり方、病状や予後を伝えるタイミングがアドバンス・ケア・プランニングとして重要である。【おわりに】 独居の高齢者が終末期を過ごすひとつの選択肢として、介護施設がある。今回、施設スタッフと話し合いを重ね情報を共有することで、切れ目ない看護が提供出来、本人の望む看取りが実現出来た。

〈パネルディスカッション〉

司 会：内藤 浩（独立行政法人地域医療機能推進機構 群馬中央病院 外科部長）  
茂木真由美（群馬県立がんセンター）

テーマ：「患者・家族の意思決定を支える」

シンポジスト：

- 田中 俊行（独立行政法人国立病院機構 高崎総合医療センター）
- 須田 旬子（独立行政法人地域医療機能推進機構 群馬中央病院）
- 津久井利恵（NPO 法人在宅福祉 かんわケア大地）
- 寺嶋 祐子（居宅介護支援センター いしかい）
- 小池 由美（群馬県立がんセンター）
- 酒井 晃洋（NPO 法人 ほほえみの会）